

石敢當の

由来(下)

小玉 正任

『姓源珠璣』の汚名をすすぐ
といふが、江戸後期、寛政十一年(一八〇〇)に『桂林漫録』が出版され、その中で『姓源珠璣』の引用として五代晋の勇士名を石敢當とし、彼

を石敢當碑の起源と書かれた。漫録は、碩学桂川中良の著で、當時ベストセラーとなり、五代晋の勇士説は、今日に至るまで辞典類に孫引きされている。実はこの引用文は、明の徐著『徐氏筆精』(一六三三年成る)の引く『姓源珠璣』の文章の丸写しである。現在、石敢當の研究者の間では、五代晋の勇士説の発信源は、姓源珠璣であり、非は『姓源珠璣』の文章の丸写しとされている。しかし、このことに疑をもつた私は、『姓源珠璣』の原文に当たることにした。同書は明の楊信民の撰、一四二一年の成書。苦心惨憺、よつやく萬曆庚子(一六〇〇年)刊行の新刻『姓源珠璣』を見つけた。同書では、五代晋の勇士名は「石敢」となつていて、石敢當碑の由来の記述は一切ない。しかもこの記事は『資治通鑑』を参考にしたとある。徐著も萬曆の人、同書を見る機会はあつたはず。にも拘らず、何故に原文にはない「石敢當」、そして由来話を付加して引用文としたのか全く理解し難いことである。ともあれ、『姓源珠璣』の汚名は、「われなきもの」非は『徐氏筆精』、『桂林漫録』



『姓源珠璣』の汚名をすすぐ

にある。幕末以来、今日まで、『姓源珠璣』の原文に当たって論文を書いている者は、寡聞にして知らぬ。

なお、わが国の民俗学者は、石敢當の由来に關し、古のもつ呪力に着目してくる。

函館市の石敢當



幅五一五の黒みかげ、高さ一三一五、
(石灰岩)の石敢當がはじめまして。これは、昭和四十一年台風で被災をつけた富古島に、川崎市民が救援活動をした返礼として、富古島民から贈られたもの。昭和四十五年に造立されたが、駅前の再開発に伴い、昭和六十一年に現在地に再建された。沖縄との文化交流の絆となるといふ。一年、講演を頼まれて沖縄にきて、那覇市内の石材店でこれを購入、自宅の庭に立てた。字形は、首里金城町の石敢當と同。

金城町の石敢當



JR川崎駅前の石敢當



高さ一七一〇の黒みかげ、高さ一三一五、

幅五一五の沖縄県富古島産のトラバーチ(石灰岩)の石敢當がはじめまして。これは、昭和四十一年台風で被災をつけた富古島に、川崎市民が救援活動をした返礼として、富古島民から贈られたもの。昭和四十五年に造立されたが、駅前の再開発に伴い、昭和六十一年に現在地に再建された。沖縄との文化交流の絆となるといふ。一年、講演を頼まれて沖縄にきて、那覇市内の石材店でこれを購入、自宅の庭に立てた。字形は、首里金城町の石敢當と同。

石敢當の現況

現在、わが国の「十八都道府県に石敢當がある。沖縄県一万基以上、

鹿児島県約一〇〇基、宮崎県約九十基、大分県一基、長崎県一基、佐賀県七基、愛媛県一基、徳島県十一基、山口県一基、広島県一基、岡山県一基、兵庫県五基、大阪府十一基、和歌山県一基、奈良県一基、京都府一基、滋賀県一基、長野県三基、静岡県一基、神奈川県四基、東京都十基、千葉県一基、埼玉県一基、宮城県一基、山形県一基、秋田県一十八基、青森県四基、

北海道一基。

造立年銘のあるわが国最古のものは、宮崎県えびの市にある元禄二年(一六八九年)造立の石敢當(同市指定民俗文化財)で、次に古いものは、沖縄県具志川村(久米島)にある雍正十二年(一七三三年)造立の泰山石敢當(同村指定民俗文化財)。わが国最北端の石敢當は、北海道函館市にあり、昭和六十二年(一九八七年)造立。

最も丈が高いのは、徳島県三加茂町の石敢當で、百八十センチある。これは文久二年(一八六二年)、悪病が流行し、大火や水難が続いたので、落のはずの鬼門に立てた。同町指定民俗文化財。全国で、ただ、県指定の民俗文化財になつて、のは、山形県鶴岡市にある石敢當。造立年は不明なるも、汚損著しく、廟堂の中にある。明治の始め、鬼県令の異名のあつた三島通庸も、この石敢當をはばかり道路計画を変更したといふ。いわく、付きのもの。他にも、ヨーロッパの石敢當がいくつもある。詳しく述べて、石敢當を御覧あれ。

